

現代通信制高校の役割の多様化に関する考察
～ 毎日通える私立単位制通信制 T 高校の取り組みと生徒の語りから ～

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
太田 恵子

近年高校進学率が96パーセントに上り、後期中等教育課程は義務教育の装いを呈している。現在、日本の高等教育課程の通学スタイルは全日制、定時制、通信制の3種類に分けられる。その中でも、通信制高校は1961年の学校教育基本法一部改正により、全日制、定時制につぐ第3の後期中等教育機関として誕生した比較的新しいタイプの学校である。

通信制高校は勤労少年たちが学ぶことのでき、毎日通学する必要性がないカリキュラムで高校卒業資格を得られる学校として設置された。しかし、この毎日通う必要がないというシステムが従来の学校のイメージとは違い、マイナーな地位の学校として認知されている。

近年、中学を卒業し働きながら高校に行くという生徒は減少しつつある中で、通信制高校は増加傾向にある。最近では、通信制高校は不登校を経験した生徒の進学先として選ばれることが多くなった。また高校を一度ドロップアウトした生徒がもう一度学校に通い高校卒業資格を得る、いわゆる学びの場であり、社会復帰の場として機能を果たしている。

本研究では、通信制高校の変容に関して中学校教員のヒアリング調査を元に、中学校での進路指導の実態を把握した。その中で選択する生徒の傾向が変わっていること、通信制高校の存在意義、そして通信制高校は毎日通わなくても卒業資格が取得できるシステムを保持しながら、生徒は毎日通うことができる環境を提供する必要性があることが浮き彫りになった。

また、実際頻繁に通学できる学校環境作りに取り組んでいる T 高校の実践と3名の生徒へのインタビュー調査から、卒業資格取得以外のニーズがあることがわかった。またこれらを構成する要素として、生徒の興味に応じた科目選択が可能なカリキュラムや教員との関係性が挙げられた。特に通信制高校の教員は生徒との関係性の中で教師的関わり、カウンセラー的関わり、友人的関わりの三種類の役割を担っている。そして時間的経過とともに生徒との関係性の中でこの役割をフレキシブルに使うことで、生徒の学校定着を強め、これらが生徒の学校生活の充実感や満足感に相関があると生徒の語りから考えられる。

これらを総合して、現在通信制高校をめぐる環境は設置当初と大きく違い変容している過程での、通信制高校のあり方として毎日通える通信制高校の教育的有効性を論じた。